# コリント人への手紙第二 1回 あいさつ 一苦しみの中で受ける慰め一 1:1~11

## はじめに

- 1. 時系列から見たパウロとコリント教会の関係
  - (1) コリントでの開拓伝道(使 18章)
    - ①使 18:9~11
    - ②コリントでの宣教は、容易なものではなかった。
    - ③パウロの宣教は1年半続き、複数の家の教会が誕生した。
  - (2) 第1の手紙(「前の手紙」。残っていない)
    - ①1 **= ! ! 5 : 9**
    - ②パウロは、第一の手紙を書いて、教会の浄化について教えた。
  - (3) クロエの家の者たちの情報と質問が書かれた教会からの手紙
    - ①1 **3 y** 1 : 11
    - ②1 ¬ J 7:1
  - (4) 第2の手紙(コリント人への手紙第一)
    - ①これは、現実問題を取り上げた牧会的書である。
    - ②コリント教会の諸問題が、後の時代の信者たちにとって教訓となる。
  - (5)「あなた方を悲しませる訪問」
    - (1)2 = y 2 : 1
    - ②この訪問は、期待外れの結果に終わった。
  - (6) 第3の手紙(「あの手紙」。残っていない)
    - ①2 ¬ リ 2:3~4
    - ②第3の手紙は、涙ながらに書かれたものである。
  - (7) 第4の手紙(コリント人への手紙第二)
    - ①パウロは、マケドニアからコリントに向かおうとしている。
    - ②3度目の訪問の準備として、この手紙を書き送った。
    - ③パウロの内面が深く表現されている。
  - (8) 3度目の訪問の予告
    - (1)2 = 11 = 13 : 1

2Co 13:1 私があなたがたのところに行くのは、これで三度目です。二人または三人の証人の証言によって、すべてのことは立証されなければなりません。

②「二人または三人の証人の証言」とは、コリント訪問の回数であろう。

- 2. この手紙の概略
  - (1) この手紙の差出人はパウロである。
    - ①4度目の手紙である。
  - (2) 宛先はコリント教会である。
    - ①この教会は、パウロの使徒的権威を疑った教会である。
    - ②パウロは、「キリスト・イエスの使徒」としての自己認識を持っていた。
    - ③この手紙は、アカイア全土の諸教会で読まれることを前提に書かれている。
- 3. アウトライン:イントロダクション
  - (1) あいさつ (1~2節)
  - (2) 苦しみの中で受ける慰め (3~11節)
- 4. 結論: 苦難の意義

苦しみの中で受ける慰めについて学ぶ。

- Ⅰ. あいさつ (1~2 節)
  - 1. 1節

2Co 1:1 神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ。

- (1) パウロは、自己紹介をもってこの手紙が書き始める。
  - (1)パウロが使徒であることを疑う者たちが、コリント教会にいたからである。
  - ②パウロは、自分は「キリスト・イエスの使徒」であると宣言する。
  - ③使徒としての召命は、神の御心によるものである。
  - ④彼は、ダマスコ途上での体験を基に、この確信を語っている。
  - ⑤この確信が、苦難に遭遇するパウロを支え続けた。
  - ⑥パウロがエペソでこの手紙を書いたとき、テモテがそばにいた。
- (2) 手紙の宛先
  - ①「コリントにある神の教会、ならびにアカイア全土にいるすべての聖徒たちへ」
  - ②「神の教会」とは、この世から呼び出され、新生した信者の群である。
    - \*かつて彼らは、偶像礼拝と道徳的堕落の中にいた。
    - \*パウロの盲教によって彼らは新生した。
    - \*新生していない人には、霊的テーマは理解できない。
    - \*問題は多かったが、それでもパウロは、多くの教会の誕生を喜んでいる。
  - ③コリントの教会以外に、アカイアの諸教会も宛先に含まれている。

\*アカイアは、ギリシア南部の地名である。 \*マケドニアは、ギリシア北部の地名である。

#### 2. 2 節

2Co 1:2 私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたにありますように。

- (1) パウロは、いつものように祝福のあいさつを送る。
  - ①彼は、金や銀(朽ちるもの)が与えられるようにとは祈らない。
  - ②彼は、霊的祝福が与えられるようにと祈る。
    - \*恵みは、福音を説明するキーワードである。
    - \*平安は、キリストによる救いの完成を描写するキーワードである。
  - ③霊的祝福の源は父なる神である。
  - ④霊的祝福を届けるための管は、主イエス・キリストである。
  - ⑤パウロは、父なる神と主イエス・キリストを同格に置く。

# Ⅱ. 苦しみの中で受ける慰め (3~11節)

1. 3 節

2Co 1:3 私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。

- (1) 3~11 節で、神への感謝が溢れ出る。
  - ①彼は、苦しみの中で受ける慰めのゆえに、神をたたえる。
- (2) パウロがたたえている対象は、神である。
  - ①「私たちの主イエス・キリストの父である神」
  - ②これは、新約聖書における神の御名の啓示である。
  - ③これは、イエス・キリストの神性を啓示する御名である。
  - ④「アブラハム、イサク、ヤコブの神」よりも御名の啓示が進展した。
  - ⑤「あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神」とも呼ばれる。 \*この神から、すべてのあわれみと慰めが流れ出る。

#### 2. 4節

2Co 1:4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。

(1) あらゆる苦しみ中に、神の慰めがある。

- ①パウロは、そのことを日々体験していた。
- ②「慰め」とは、単なる同情ではなく、励ましや奨励を含むことばである。
- (2) 慰めが与えられる一つの理由
  - (1)自分が受けた慰めによって、苦しみの中にある人たちを慰めることができる。
  - ②慰めの目的は、楽な生活を手に入れることではなく、慰め人になることである。
  - ③これは、苦難の神学である。

#### 3. 5節

2Co 1:5 私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによって私たちの慰めもあ ふれているからです。

- (1) 他の人を慰めることができる理由は、何か。
  - ①苦難の中で、キリストから十分な慰めを受けるようになるから。
- (2)「私たちにキリストの苦難があふれている」
  - (1)これは、罪の贖いのための十字架の苦しみではない。
  - ②十字架の苦しみは、キリストだけが経験されたものである。。
  - ③この苦難は、キリストを信じる者が通過する苦難である。
  - ④地上生涯において、キリストはさまざまな苦難を通過された。
  - ⑤キリストに従う者も、さまざまな苦難を通過する。
  - ⑥今も、教会に属する聖徒が苦しむとき、キリストも苦しまれる。
- (3)「キリストによって私たちの慰めもあふれている」
  - ①しかし、苦難には同じだけの慰めが伴う。
  - ②キリストから与えられる慰めは、苦難を乗り越えるのに十分である。

#### 3. 6節

2Co 1:6 私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰めと救いのためです。私たちが慰めを受けるとすれば、それもあなたがたの慰めのためです。その慰めは、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。

- (1) パウロが経験する苦しみは、信者たちの慰めと救いにつながる。
  - ①パウロが苦しみに耐えている姿は、信者たちにとって慰めとなる。
  - ②それを見て、信者たちは慰めと救いを得る。
  - ③ここでの「救い」とは、霊的救いではなく、試練に打ち勝つ力のことである。

- (2) パウロが受ける慰めは、信者たちの慰めにつながる。
  - ①その慰めは、信者たちにパウロが受けているのと同じ力を与えてくれる。
  - ②その力とは、苦難に耐え抜く力である。
  - ③苦難の中で慰めを受けた者だけが、苦難の中にいる人を慰めることができる。

# 4. 7節

2Co 1:7 私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

- (1) パウロは、コリントの信者について揺るぎなき望みを抱いている。
  - (1)彼らもまた、パウロと同じように苦しんでいる。
  - ②彼らもまた、パウロと同じように慰めを受けている。

#### 5. 8節

2Co 1:8 兄弟たち。アジアで起こった私たちの苦難について、あなたがたに知らずにいてほしくありません。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、生きる望みさえ失うほどでした。

- (1) ここでパウロは、苦難の具体例を挙げる。
  - ①「アジア」とは、小アジア西部の「アジア州」のことである。
  - ②苦難がなんであるかは分からない。
    - \*エペソで起こった暴動(使19:23~41)
    - \*病
    - \*コリントからの残念な知らせ
  - ③苦難の内容が明かされていないので、豊かな適用が可能になる。
- (2) それは背負いきれないほどの苦難であった。
  - ①「非常に激しい」
  - ②「耐えられないほどの圧迫し
  - ③「生きる望みさえ失うほど」

#### 6. 9節

2Co 1:9 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、 死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。

- (1) パウロは、絶望した。
  - ①死刑の宣告を受けた思いになった。

- ②自分のうちに頼みとするものは何もなくなった。
- (2) それゆえパウロは、神に頼る者となった。
  - ①全能の神である。
  - ②死者をよみがえらせてくださる神である。
  - ③死刑の宣告を受けた者にとっては、死者をよみがえらせる神だけが頼りである。

## 6. 10節

2Co 1:10 神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいます。私たちはこの神に希望を置いています。

- (1) 3つの時制による救い(KJV)
  - ①神は、救い出してくださいました(過去)。
  - ②神は、救い出してくださいます (現在)。
  - ③神は、これからも救い出してくださるでしょう(未来)。
- (2) エペソの暴動は、突如静まった。

①使 20:1

Act 20:1 騒ぎが収まると、パウロは弟子たちを呼び集めて励まし、別れを告げ、マケドニアに向けて出発した。

②この体験をしたパウロは、「この神に希望を置いています」と語っている。

#### 7. 11 節

2Co 1:11 あなたがたも祈りによって協力してくれれば、神は私たちを救い出してくださいます。そのようにして、多くの人たちの助けを通して私たちに与えられた恵みについて、多くの人たちが感謝をささげるようになるのです。

- (1) パウロは、コリントの信者たちの祈りを感謝している。
  - ①信者たちの中には、パウロの権威を疑う者たちもいた。
  - ②しかしパウロは、多くの者たちが祈ってくれていることを前提に感謝している。 \*多くの者たちが祈った。
    - \*その祈りが聞かれ、パウロに恵みが与えられた(解放された)。
    - \*祈った多くの者たちが、神に感謝を献げるようになった。

## 結論: 苦難の意義

- 1. 苦難は、神の戒めを学ぶ機会となる。
  - (1) 詩119:71

Psa 119:71 苦しみにあったことは 私にとって幸せでした。/それにより 私はあなたのおき てを学びました。

- 2. 苦難は、神の慰めを経験する機会となる。
  - (1) 詩 119:143

Psa 119:143 苦難と窮乏が私に襲いかかっています。/しかし あなたの仰せは私の喜びです。

- 3. 苦難は、祈りが聞かれることを経験する機会となる。
  - (1) 詩86:7

Psa 86:7 苦難の日に 私はあなたを呼び求めます。/あなたが私に答えてくださるからです。

- 4. 苦難は、神の民が神をたたえる機会となる。
  - (1) 詩50:15

Psa 50:15 苦難の日に/わたしを呼び求めよ。/わたしはあなたを助け出し/あなたはわたしをあがめる。」

# コリント人への手紙第二 2回 計画延期に関する弁明―計画の延期― 1:12~2:4

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
      - \*計画変更の理由(1:12~2:4)
      - \*厳しい手紙の結果(2:5~17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)

## 2. 注目すべき点

- (1) この書簡は、明確なアウトラインを作るのが難しい。
- (2) 心の赴くままに、極めて個人的な内容を記しているからである。
- (3) その内容は、まるで牧会書簡(1テモ、2テモ、テト)のようである。
- (4) 教理を教えるのではなく、自分に向けられた批判に回答している。
- 3. アウトライン:計画変更の理由
  - (1) 誠実な行為(1:12~14)
  - (2) 一貫した行為 (1:15~22)
  - (3) 愛に基づく行為 (1:23~2:4)
- 4. 結論
  - (1) 使徒たちへの信頼
  - (2) 救われた者が受ける祝福

# 計画変更の理由について学ぶ。

- I. 誠実な行為 (1:12~14)
  - 1. 12 節

2Co 1:12 私たちが誇りとすること、私たちの良心が証ししていることは、私たちがこの世において、特にあなたがたに対して、神から来る純真さと誠実さをもって、肉的な知恵によらず、神の恵みによって行動してきたということです。

- (1) パウロは、自分の奉仕を誇りとしている。
  - ①自分の良心が証ししている。
- (2) コリントの信者たちへの奉仕の内容
  - ①真実さと誠実さをもって
    - \*神から来る透明な真実さと誠実さで奉仕した。
  - ②肉的な知恵によらず
    - \*人間的な手法に頼らないで奉仕した。
  - ③神の恵みによって
    - \*値なしに受ける知恵と力によって奉仕した。

#### 2. 13~14節

2Co 1:13 私たちは、あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません。あなたがたは、私たちについてすでにある程度理解しているのですから、私たちの主イエスの日には、あなたがたが私たちの誇りであるように、私たちもあなたがたの誇りであることを、完全に理解してくれるものと期待しています。

#### 2Co 1:14 「前節と合節]

- (1) 真実さと誠実さは、この手紙の特徴にもなっている。
  - ①パウロは率直に書いているので、行間を読む努力をする必要はない。
  - ②文字どおり、そのまま読めばよい。
    - \*「あなたがたが読んで理解できること以外は何も書いていません」
- (2) コリントの信者たちは、パウロについてある程度理解している。
  - ①パウロを疑う者がいた。
  - ②パウロを信頼する者も、その理解は不十分であった。
- (3) パウロの願いは、彼らの理解が完全なものとなることである。
  - ①「主イエスの日」とは、キリストの御座の裁きで信者が裁きを受ける日である。
  - ②信者は、信仰によって行ったわざのゆえに、報奨を受ける。
  - ③その日パウロは、自分が救いに導いた人たちの顔を見て、彼らを誇りと思う。
  - ④彼らもまた、パウロのことを誇りと感じる。

## Ⅱ. 一貫した行為(1:15~22)

1. 15~16節

2Co 1:15 この確信をもって、私はまずあなたがたのところを訪れて、あなたがたが恵みを二

度得られるようにと計画しました。

2Co 1:16 すなわち、あなたがたのところを通ってマケドニアに赴き、そしてマケドニアから 再びあなたがたのところに帰り、あなたがたに送られてユダヤに行きたいと思ったのです。

- (1)「この確信をもって」
  - ①彼らが、パウロの誠実な姿勢を認め、使徒として信頼してくれるようになること。
  - ②パウロは、このような確信を持ってコリントを訪問したいと願った。

# (2) 旅の計画

- ①「あなたがたを悲しませる訪問」(2:1) があった。
- ②その後、再訪の計画を伝えた。
  - \*エペソから船で→コリント→マケドニア→コリント→ユダヤ
  - \*この計画に基づけば、コリントを2度訪問することになる。
  - \*コリントの信者たちに送られて、ユダヤに向かいたい。
- ③しかし彼は、エペソ→マケドニアへと移動した。
  - \*マケドニアに滞在しながら、「あの手紙」を書いた。
  - \*これは、第3の手紙である。
  - \*第3の手紙は、涙ながらに書かれたものである。

## 2. 17節

2Co 1:17 このように願った私は軽率だったのでしょうか。それとも、私が計画することは人間的な計画であって、そのため私には、「はい、はい」は同時に「いいえ、いいえ」になるのでしょうか。

- (1) パウロの計画は、変更された。
  - ①エペソ→トロアス (テモテを会えなかった) →マケドニア
  - ②コリントを訪問しなかったことには理由があった。
- (2) パウロを非難する人たちのことば
  - ①「パウロは軽率だ」
  - ②「パウロの計画は、人間的なものだ」
  - ③「『はい、はい』と言いながら、同時に『いいえ、いいえ』と言っている」

#### 3. 18 節

2Co 1:18 神の真実にかけて言いますが、あなたがたに対する私たちのことばは、「はい」であると同時に「いいえ」である、というようなものではありません。

(1) パウロの教えは信頼できないという批判

①日常的なテーマに関して信頼できないのだから、教えに関しても信頼できない。

# (2) パウロの反論

- ①「神の真実にかけて言う」とは、非常に重いことばである。
- ②パウロのことばは、気まぐれなものではない。

## 4. 19節

2Co 1:19 私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

- (1) コリントでの宣教は、パウロ、シルワノ、テモテの3人で行った(使18:5)。
  - ①彼らは、神の子キリスト・イエスを宣べ伝えた。
  - ②キリスト・イエスは信頼できる方なので、彼らのメッセージも信頼できる。
  - ③信頼できる神の子を伝えながら、本人が不真実であるというのは不可能である。

### 5. 20節

2Co 1:20 神の約束はことごとく、この方において「はい」となりました。それで私たちは、この方によって「アーメン」と言い、神に栄光を帰するのです。

- (1) 神の約束がいくつあろうとも、それらすべてがキリストにおいて成就した。
  - ①それゆえ信者は、キリストを通して「アーメン」と言う。
  - ②さらに、神に栄光を帰す。
- (2) コリントの信者が、祝福の体験をしたのは、福音を信じたからである。
  - ①福音を伝えたのは、パウロ、シルワノ、テモテの3人である。
  - ②神が用いた器は、詐欺師でも嘘つきでもない。

#### 6. 21~22節

2Co 1:21 私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

2Co 1:22 神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

- (1) パウロとコリントの信者は、同じ霊的祝福で結ばれている。
  - ①聖霊によって油を注がれている。
  - ②聖霊による証印を押されている。
  - ③聖霊の内住が与えられている。

# Ⅲ. 愛に基づく行為 (1:23~2:4)

1. 23 節

2Co 1:23 私は自分のいのちにかけ、神を証人にお呼びして言います。私がまだコリントへ行かないでいるのは、あなたがたへの思いやりからです。

- (1) パウロは、予定を変更した理由を述べる。
  - ①人間には、パウロの本心は見えない。
  - ②そこで彼は、神を証人に呼んで、予定変更の理由に言及する。
- (2) 予定変更の理由は、彼らへの思いやりである。
  - ①もし予定通りに訪問するなら、厳しい対応をすることになる。
  - ②彼らは、教会内の罪をそのまま放置していた。
  - ③パウロは、何人かの者たちを厳しく叱責することになる。
  - ④それは、パウロの本意ではない。

#### 2. 24 節

2Co 1:24 私たちは、あなたがたの信仰を支配しようとする者ではなく、あなたがたの喜びのために協力して働く者です。あなたがたは信仰に堅く立っているのですから。

- (1) パウロは、自分は支配者でないことを明確に語る。
  - ①パウロ、シルワノ、テモテの3人は、協力して働く者である。
  - ②コリントの信者たちが喜びを体験できるように援助する者である。
  - ③彼らは、教理に関しては正しく理解している。
  - ④問題は、教理の実践に関するものである。

#### 3 1 節

#### 2Co 2:1 そこで私は、あなたがたを悲しませる訪問は二度としない、と決心しました。

- (1) パウロは、彼らを悲しませる訪問は二度としないと、決心した。
  - ①「あなたがたを悲しませる訪問」とは、突然の訪問である。
  - ②この訪問は、良い結果を生まなかった。

#### 4. 2節

2Co 2:2 もし私があなたがたを悲しませるなら、私が悲しませているその人以外に、だれが私を喜ばせてくれるでしょう。

- (1) パウロの願いは、彼らが喜びを体験することである。
  - ①パウロの叱責で彼らが悲しむなら、パウロを喜ばせてくれる者がいなくなる。

②予定通りにコリントを訪問することは、お互いにとって悲しみをもたらす。

#### 5. 3節

2Co 2:3 あの手紙を書いたのは、私が訪れるときに、私に喜びをもたらすはずの人たちから、悲しみを受けることがないようにするためでした。私の喜びがあなたがたすべての喜びであると、私はあなたがたすべてについて確信しています。

- (1) パウロは、「あの手紙」を書いた。
  - ①パウロがコリント教会に宛てた第3の手紙である。
  - ②「悲しみの訪問」の直後に書かれた。
  - ③この手紙が、問題解決に役立つことを願った。
  - ④その結果、喜びをもってコリントを訪問できるようになることを願った。

## 6. 4節

2Co 2:4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらにあなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を、あなたがたに知ってもらうためでした。

- (1) パウロは、「あの手紙」をどのように書いたのか。
  - ①「大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに」書いた。
  - ②彼らを「悲しませるためでない」。
  - ③「あふれるばかりの愛を」知ってもらうため。

# 結論

- 1. 使徒たちへの信頼
  - (1) 1:19

2Co 1:19 私たち、すなわち、私とシルワノとテモテが、あなたがたの間で宣べ伝えた神の子キリスト・イエスは、「はい」と同時に「いいえ」であるような方ではありません。この方においては「はい」だけがあるのです。

- (2) 使徒たちを信頼する根拠
  - ①神の子キリスト・イエスは、変わることのない真実なお方である。
  - ②そのお方を伝えている使徒たちが、詐欺師や嘘つきであるわけがない。
  - ③彼らは、支配者ではなく、喜びをもたらすための援助者である。
  - ④使徒たちの教えを学ぶことは、健全な教理を理解することである。
  - ⑤コリント教会の問題は、教理の理解ではなく、教理の実践にあった。

# 2. 救われた者が受ける祝福

# $(1) 1:21\sim22$

2Co 1:21 私たちをあなたがたと一緒にキリストのうちに堅く保ち、私たちに油を注がれた方は神です。

2Co 1:22 神はまた、私たちに証印を押し、保証として御霊を私たちの心に与えてくださいました。

- (2) 聖霊によって油を注がれている。
  - ①みことばを理解する力が与えられている。
- (3) 聖霊による証印を押されている。
  - ①救いの確証が与えられている。
  - ②神の所有とされている。
- (4) 聖霊の内住が与えられている。
  - \*クリスチャン生活を営むための力が与えられている。
  - \*これは、救いが完成することの保証である。
  - \*内住の聖霊に日々導かれているなら、救いの完成への確信が強くなる。

# コリント人への手紙第二 3回 計画延期に関する弁明―厳しい手紙の結果― 2:5~17

#### はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
      - \*計画変更の理由(1:12~2:4)
      - \*厳しい手紙の結果(2:5~17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、厳しい手紙を書いた後の自分の気持ちを吐露する。
  - (2) パウロの牧会者として配慮が、随所に見られる。
    - ①罪を犯した者の名前を伏せている。
    - ②処罰の目的は、信仰の回復であることを知っている。
    - ③悔い改めた人の心情をよく理解している。
- 3. アウトライン:厳しい手紙の結果
  - (1) 処罰された人の扱い(5~11節)
  - (2) 計画変更後の旅(12~13節)
  - (3) キリストにある勝利(14~17節)
- 4. 結論:信頼できる奉仕者の4つの特徴(2:17)

# 厳しい手紙の結果について学ぶ。

- I. 処罰された人の扱い(5~11節)
  - 1. 5節

2Co 2:5 もしある人が悲しみをもたらしたのなら、その人は私を悲しませたのではありません。 むしろ、言い過ぎにならないように言えば、ある程度まで、あなたがたすべてを悲しませた のです。

(1) パウロの牧会的配慮に注目しよう。

- ①パウロは「ある人」と言い、加害者の実名も被害者の実名も伏せている。
- ②誰かが罪を犯せば、それは教会全体に悲しみをもたらす。
- ③それは、パウロ個人に対する罪ではなく、教会全体に影響を及ぼすものである。
- (2) 悲しみをもたらした人とは誰か。
  - ①文脈上、1コリ5:1に出てくる人物である可能性が大である。
  - ②彼は、近親相姦の罪を犯していた。

1Co 5:1 現に聞くところによれば、あなたがたの間には淫らな行いがあり、しかもそれは、異邦人の間にもないほどの淫らな行いで、父の妻を妻にしている者がいるとのことです。

# 2. 6~8節

2Co 2:6 その人にとっては、すでに多数の人から受けたあの処罰で十分ですから、

2Co 2:7 あなたがたは、むしろその人を赦し、慰めてあげなさい。そうしないと、その人はあまりにも深い悲しみに押しつぶされてしまうかもしれません。

2Co 2:8 そこで私はあなたがたに、その人へのあなたがたの愛を確認することを勧めます。

- (1) これまでに起こったこと
  - (1)コリント教会は、罪人に対する懲戒を実施し、彼を除名した。
  - ②除名された人は、悔い改め、主との和解に導かれた。
  - ③懲戒が本来の効果を発揮した。
- (2) 今後、教会として為すべきこと
  - ①その人にとっては、多数の人から受けた除名処分で十分である。 \*この処分は、過半数の会員の賛成によって実行された。
  - ②いつまでも今の状態を継続すべきではない。
  - ③その人が深い悲しみに押しつぶされないように、行動を起こすべきである。 \*その人を赦し、慰めてあげる。
    - \*その人への愛を確認する(教会に受け入れる)。
- (3) 今日の教会へのチャレンジ
  - ①聖書は神のことばであると認めながら、それを実行していないことが多い。

#### 4. 9節

2Co 2:9 私が手紙を書いたのは、あなたがたがすべてのことにおいて従順であるかどうか、試すためでした。

(1)「私が手紙を書いた」とは、「あの手紙」(厳しい手紙)(3~4節)であろう。

- ①罪人に対する懲戒を実施するかどうかを試すためだけではない。
- ②パウロの判断に従うかどうかを試すためでもある。
- ③彼らは、パウロの判断を受け入れた。
- ④つまり、パウロの使徒としての権威を認めたということである。
- ⑤次に実行すべきは、悔い改めた人を受け入れることである。

# 5. 10~11節

2Co 2:10 あなたがたが何かのことで人を赦すなら、私もそうします。私が何かのことで赦したとすれば、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。

2Co 2:11 それは、私たちがサタンに乗じられないようにするためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

- (1) パウロとコリントの信者たちは、一致している。
  - ①彼らが悔い改めた人を赦すなら、パウロもそうする。
  - ②その人がパウロに個人的に謝罪すべきことがある場合でも、パウロは赦す。
  - ③それは、コリントの信者たちとの一致を示すためである。
  - ④その赦しは、キリストの御前で行われるものである。

#### (2) サタンの策略

- ①懲戒を実行せずに、罪をそのまま放置する。
  - \*これは、不道徳による教会の汚染であり破壊である。
- ②悔い改めた人を赦さない。
  - \*これは、過剰な悲しみによる信者の破壊である。

# Ⅱ. 計画変更後の旅(12~13節)

1. 12~13 節

2Co 2:12 私がキリストの福音を伝えるためにトロアスに行ったとき、主は私のために門を開いておられましたが、

2Co 2:13 私は、兄弟テトスに会えなかったので、心に安らぎがありませんでした。それで人々に別れを告げて、マケドニアに向けて出発しました。

- (1) 計画変更のテーマに戻る (4節とつながる)。
  - ①パウロは、コリント訪問の計画を変更した。
  - ②この変更は、厳しい姿勢でコリントを訪問することを避けるためであった。

# (2) 計画変更後の旅

①パウロは、エペソからトロアス(海に面した西端の町)に行った。

- ②そこでテトスに会う予定であった。
- ③テトスからコリント教会に関するニュースを聞く予定でいた。
- ④トロアスで予期せぬ祝福が与えられた。\*伝道の扉が開かれたのである。
- ⑤しかし、心の安らぎがなかったので、マケドニアに向った(海を渡った)。 \*テトスに会えなかった。
  - \*コリント教会への責務が、重くのしかかっていた。
- ⑥宣教の機会を放棄してまで、コリント教会の霊的戦いに参加しようとした。

# Ⅲ. キリストにある勝利(14~17節)

1. 14 節

2Co 2:14 しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちをキリストによる凱旋の行列に加え、私たちを通してキリストを知る知識の香りを、いたるところで放ってくださいます。

- (1) 不安な状態から感謝の心への飛躍
  - ①パウロは突然、神への感謝を口にする。
  - ②どこに遣わされようとも、そこにはキリストにある勝利が用意されている。
- (2) 凱旋将軍の行列がたとえとして用いられる。
  - ①凱旋将軍は、捕虜を最後尾に従えながら、都の大通りを行進する。
  - ②香をたく者たちが、行列の両側を行進する。
  - ③町中が、彼らがたく香の芳しい香りで満ちる。
- (3) 主イエスは、征服者として、トロアスからマケドニアまで行進される。
  - ①パウロは、その行列に加えられている。
  - ②主イエスは、どこに行こうとも、ご自身のしもべたちを通して働かれる。
  - ③神は、パウロの宣教を通して、キリストを知る知識の香りを放ってくださる。
  - ④パウロは敗北者ではなく、キリストにあって勝利者である。

## 2. 15 節

2Co 2:15 私たちは、救われる人々の中でも、滅びる人々の中でも、神に献げられた芳しいキリストの香りなのです。

- (1) 凱旋行列に伴う香りは、2つの効果を発揮する。
  - ①勝者にとっては、栄光ある勝利のしるしとなる。
  - ②敗者にとっては、呪いのしるしとなる。

- (2) 福音の使者たちは、2つの役割を果たす。
  - ①救われる人にとっては、栄光ある未来の保証となる。
  - ②滅びる人にとっては、呪いの前兆となる。
- (3) いずれの場合も、神に栄光が帰される。
  - ①前者の場合は、神の愛と恵みがたたえられる。
  - ②後者の場合は、神の聖と義がたたえられる。

# 3. 16節

2Co 2:16 滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りであり、救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りです。このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか。

- (1) 福音の使者の2面性
  - ①クリスチャンは、滅びる人々にとっては、死から出て死に至らせる香りである。
  - ②救われる人々にとっては、いのちから出ていのちに至らせる香りである。
- (2) 福音の伝達は、永遠の結果をもたらす厳粛な責務である。
  - ①パウロの叫びは当然である。
  - ②「このような務めにふさわしい人は、いったいだれでしょうか」
  - ③パウロは、神の恵みのゆえに、自分たちこそ、その務めにふさわしいと言う。

#### 4. 17 節

2Co 2:17 私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。

- (1) 多くの人たちとは、偽教師たちである。
  - ①彼らは、信者たちを惑わせ、パウロの使徒職に疑問を抱かせようとしている。
  - ②彼らは、神のことばに混ぜ物をして売っている(宗教を商売にしている)。
  - ③彼らは、ワインを水で薄めるように、神のことばを誤った教理で薄めている。 \*恵みに律法を混ぜている。
- (2) パウロは、偽教師のようではない。
  - ①偽教師は、利己的動機から語る。
  - ②パウロは、真実だけを語る。
  - ③パウロは、すべてのキリストのしもべが真似るべき手本である。

結論:信頼できる奉仕者の4つの特徴(2:17)

2Co 2:17 私たちは、多くの人たちのように、神のことばに混ぜ物をして売ったりせず、誠実な者として、また神から遣わされた者として、神の御前でキリストにあって語るのです。

- 1. 「誠実な者として」
  - (1) 純粋な動機を持つ者
  - (2) 透明な奉仕をする者
  - (3) 隠し事がない者
- 2. 「神から遣わされた者として」
  - (1) 神から派遣された者
  - (2) 神のことばだけを語る者
  - (3) 神から奉仕のための力を受ける者
- 3. 「神の御前で」
  - (1) 神がともにおられることを知っている者
  - (2) 神に対する説明責任を感じている者
  - (3) 神の目に隠されたものは何もないことを知っている者
- 4. 「キリストにあって語る」
  - (1) キリストの御名によって語る者
  - (2) キリストの権威によって語る者
  - (3) キリストの代理人として語る者

# コリント人への手紙第二 4回 奉仕の本質の解説―新しい契約に仕える祝福― 3:1~11

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
      - \*新しい契約に仕える祝福 (3:1~11)
      - \*大胆な奉仕(3:12~4:6)
      - \*宝を入れた土の器(4:7~5:10)
      - \*和解の奉仕(5:11~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、クリスチャンの奉仕とはいかなるものかについて語る。
  - (2) パウロは、クリスチャンの奉仕とモーセの奉仕を対比させる。
    - ①恵みの時代における奉仕は、律法の時代における奉仕よりもすぐれている。
  - (3) パウロは、クリスチャンの奉仕が栄光に富んだものであることを教える。
    - ①偽教師たちは、ユダヤ主義者たちであった。
- 3. アウトライン:新しい契約に仕える祝福(3:1~11)
  - (1) パウロの使徒職を認める推薦状 (1~5節)
  - (2) 古い契約と新しい契約の対比(6~11節)
- 4. 結論
  - (1) パウロが書いた推薦状
  - (2) 神の推薦状

## 新しい契約に仕える祝福について学ぶ。

- Ⅰ. パウロの使徒職を認める推薦状(1~5節)
  - 1. 1節
- 2Co 3:1 私たちは、またもや自分を推薦しようとしているのでしょうか。それとも、ある人々

のように、あなたがたに宛てた推薦状とか、あなたがたからの推薦状とかが、私たちに必要なのでしょうか。

- (1) 2 コリ 2:17 で、パウロは、自分たちの奉仕の 4 つの特徴を挙げた。
  - ①これは、前回のメッセージの結論であった。
  - ②この発言は真実な心から出たものであったが、誤解する人が出るかもしれない。
  - ③特に、パウロの敵対者たちが、これを「自己推薦」と取る可能性は大であった。
  - ④そこでパウロは、自分には「自己推薦」の必要性はないと語る。
- (2)「ある人々」は、推薦状を必要としていた。
  - ①彼らは、コリント教会に忍び込んで来た偽教師たちである。
  - ②彼らは、推薦状を持ってきた(偽造された推薦状の可能性もある)。
  - ③コリント教会を去るときには、別の教会への推薦状を要求したはずである。
  - ④ローマ世界では、旅人のために推薦状を書く習慣があった。
    - \*人々は、推薦状を持っている人を安心して自宅に受け入れた。
    - \*高官が家来のために推薦状を書くこともあった。
    - \*初期の教会でも、同じような習慣があった。
  - (5)パウロは、決してそのような習慣を否定しているわけではない。
  - ⑥彼は、偽教師たちには推薦状しか資格証明がないという点を強調している。

#### 2. 2節

2Co 3:2 私たちの推薦状はあなたがたです。それは私たちの心に書き記されていて、すべての人に知られ、また読まれています。

- (1) 偽教師たちの主張
  - ①彼らは、パウロの使徒職に疑問を呈した。
  - ②次に来るときは、エルサレム教会からの推薦状を持ってこいと言ったか。
- (2) パウロの反論
  - ①紙にペンとインクで書かれた推薦状は、不要である。
  - ②なぜなら、コリントの信者が推薦状だからである。
    - \*パウロの伝道により、偶像礼拝者であった者たちが救われた。
    - \*信者になった者たちは、この世から分離し、神とともに歩んでいる。
  - ③コリントの信者の救い(この手紙)は、パウロの心に書き記されている。
  - ④彼らの信者としての歩みは、すべての人に知られている(読まれている)。
- 3. 3節

2Co 3:3 あなたがたが、私たちの奉仕の結果としてのキリストの手紙であることは、明らかです。それは、墨によってではなく生ける神の御霊によって、石の板にではなく人の心の板に書き記されたものです。

- (1) コリントの信者たちは、「キリストの手紙」である。
  - ①キリストが彼らを救った。
  - ②その際用いられたのが、パウロである。
  - ③コリントの信者たちは、「パウロの推薦状」であり、「キリストの手紙」である。
- (2) 人間の手紙とキリストの手紙の対比
  - ①墨によるか、生ける神の御霊によるか、の違いがある。
    - \*一時的なものと永続するものの対比
  - ②石の板にか、人の心の板にか、の違いがある。
    - \*モーセの律法とキリストの律法の対比が暗示されている。

#### 4. 4~5節

2Co 3:4 私たちはキリストによって、神の御前でこのような確信を抱いています。 2Co 3:5 何かを、自分が成したことだと考える資格は、私たち自身にはありません。私たちの資格は神から与えられるものです。

- (1) パウロの使徒としての確信
  - ①奉什の力は、自分のうちにあるのではなく、上から与えられるものである。
  - ②キリストのうちにあることによって、力が与えられる。
  - ③キリストがパウロを用いて働かれたということである。
  - ④パウロの伝道の実は、パウロに使徒としての資格があることを証明している。

## Ⅱ. 古い契約と新しい契約の対比(6~11節)

1. 6節

2Co 3:6 神は私たちに、新しい契約に仕える者となる資格を下さいました。文字に仕える者ではなく、御霊に仕える者となる資格です。文字は殺し、御霊は生かすからです。

- (1) ここから、旧約と新約の対比が始まる。
  - ①旧約は、双務契約である。
    - \*律法への従順が祝福の条件になっている。
    - \*人間には守ることのできない契約である。
  - ②新約は、片務契約である。
    - \*人間は、恵みと信仰によって救われる。
    - \*この契約は、旧約が為し得なかったことを可能にする。

- ③偽教師たち (パウロの敵対者たち) は、福音に混ぜ物を入れていた。 \*モーセの律法のあるものを守らなければ救われない。
- ④神はパウロに、新しい契約に仕える者となる資格を与えた。
  - \*文字(律法)に仕える者ではなく、御霊(福音)に仕える者となる資格。
  - \*文字(律法)は殺し、御霊(福音)は生かす。

## 2. 7~8節

2Co 3:7 石の上に刻まれた文字による、死に仕える務めさえ栄光を帯びたものであり、イスラエルの子らはモーセの顔にあった消え去る栄光のために、モーセの顔を見つめることができないほどでした。そうであれば、

2Co 3:8 御霊に仕える務めは、もっと栄光を帯びたものとならないでしょうか。

- (1) 旧約と新約の対比が続く。
  - ①ここでは「栄光」というキーワードを軸として解説が進められる。
- (2) 旧約のための奉仕
  - ①「石の上に刻まれた文字」とは、十戒のことである。
  - ②十戒を守らないなら、死を宣告される。
  - ③それは死に仕える務めであるが、その務めさえ栄光を帯びたものである。
  - ④モーセの顔は、栄光に輝いた。
  - ⑤消え去る栄光であったが、民はモーセの顔を見つめることができなかった。
- (3) 新約のための奉仕
  - ①これは、御霊(福音)に仕える務めである。
  - ②この務めは、より栄光を帯びたものとなる。

#### 3. 9節

2Co 3:9 罪に定める務めに栄光があるのなら、義とする務めは、なおいっそう栄光に満ちあふれます。

- (1)「罪に定める務め」とは、旧約に仕える奉仕である。
  - ①それは、人間に有罪宣言を発する奉仕である。
  - ②律法には、罪人をメシアに導くという役割があった。
  - ③それゆえ、旧約に仕えることにも栄光があったのである。
- (2)「義とする務め」とは、新約に仕える奉仕である。
  - ①有罪を宣言する奉仕よりも、義を宣言する奉仕のほうが、栄光に満ちあふれる。

# 4. 10節

2Co 3:10 実にこの点において、かつては栄光を受けたものが、それよりさらにすぐれた栄光のゆえに、栄光のないものになっているのです。

- (1) 旧約に仕える奉仕にも、栄光はあった。
  - ①それよりもさらにすぐれた栄光が現われたとき、かつての栄光は消えた。
  - ②つまり、新約の栄光が、旧約の栄光を消したのである。
    - (ILL) 太陽が輝くと、月や星の輝きは消える。

### 5. 11節

2Co 3:11 消え去るべきものが栄光の中にあったのなら、永続するものは、なおのこと栄光に包まれているはずです。

- (1)「消え去るべきものが栄光とともに (with) あったのなら」 ①この栄光は、永続するものの中にある栄光である。
- (2)「永続するものは、なおのこと栄光のうちに (in) あるはずである」
  - ①「with glory | と「in glory | の対比がある。

# 結論

- 1. パウロが書いた推薦状
  - (1) ロマ16:1~2

Rom 16:1 私たちの姉妹で、ケンクレアにある教会の奉仕者であるフィベを、あなたがたに推薦します。

Rom 16:2 どうか、聖徒にふさわしく、主にあって彼女を歓迎し、あなたがたの助けが必要であれば、どんなことでも助けてあげてください。彼女は、多くの人々の支援者で、私自身の支援者でもあるのです。

(2)  $1 = 0.16 : 10 \sim 11$ 

1Co 16:10 テモテがそちらに行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようにしてあげてください。彼も私と同じように、主のみわざに励んでいるのです。

1Co 16:11 だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来 させてください。私は、彼が兄弟たちと一緒に戻るのを待っています。

(3) 1 = 116 : 3

1Co 16:3 私がそちらに着いたら、あなたがたの承認を得た人たちに手紙を持たせてエルサレムに派遣し、あなたがたの贈り物を届けさせましょう。

# 2. 神の手紙

- (1) 私たちが求めるべき推薦状は、「神の手紙」である。
- (2) パウロの推薦状は、コリントの信者たちである。
  - ①神が彼らを救われた。
  - ②パウロはそのために用いられた主のしもべである。
    - \*パウロの伝道により、偶像礼拝者であった者たちが救われた。
    - \*信者になった者たちは、この世から分離し、神とともに歩んでいる。
  - ③コリントの信者たちは「神の手紙」であり、「パウロの推薦状」である。
- (3) 按手礼の祝福
- (4) しかし、「神の手紙」は、より大きな祝福である。

# コリント人への手紙第二 5回 奉仕の本質の解説―大胆な奉仕― 3:12~4:6

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
      - \*新しい契約に仕える祝福 (3:1~11)
      - \*大胆な奉仕(3:12~4:6)
      - \*宝を入れた土の器(4:7~5:10)
      - \*和解の奉仕(5:11~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、奉仕の本質について語る。
  - (2) 恵みの時代における奉仕は、律法の時代における奉仕よりも優れている。
  - (3) それゆえ、大胆な奉仕を行っている。
  - (4) パウロは、コリントの信者たちが自分を見倣ってくれることを期待している。
- 3. アウトライン:大胆な奉仕(3:12~4:6)
  - (1) 大胆な奉仕の理由 (3:12~18)
  - (2) 大胆な奉仕の内容 (4:1~6)
- 4. 結論:日本宣教について
  - (1) 宣教の敵
  - (2) 宣教の内容
  - (3) 宣教の力

#### 大胆な奉仕の理由と内容について学ぶ。

- I. 大胆な奉仕の理由 (3:12~18)
  - 1. 12 節

2Co 3:12 このような望みを抱いているので、私たちはきわめて大胆にふるまいます。

- (1)「このような望み」があるので、大胆にふるまうことができる。
  - ①パウロには、福音の栄光は消え去ることがないという確信があった(3:11)。
  - ②福音に対する絶対的な信頼が、パウロを大胆にしている。
  - ③パウロには、隠すものは何もない。
  - ④新約聖書における「奥義」とは、隠されていた真理の啓示である。\*強調点は、啓示されたという点にある。
- (2) 福音の内容は明白である。
  - ① 救いは、恵みと信仰によって与えられる。
  - ②信仰の内容は、「福音の三要素」である。
  - ③天国と地獄が存在することは、明白である。

## 2. 13節

2Co 3:13 モーセのようなことはしません。彼は、消え去るものの最後をイスラエルの子らに見せないように、自分の顔に覆いを掛けました。

- (1) 出34:29~35を根拠とした説明
  - ①【主】と対話したモーセの顔は、栄光の輝きを放っていた。
  - ②イスラエルの民は、モーセの前に出ることを恐れた。
  - ③モーセは、話し終えると、自分の顔に覆いを掛けた。
  - ④栄光が消えて行くところを民に見せたくなかったからである。\*民の不信仰を促進する危険性がある。
- (2) パウロは、モーセがしたようなことはしない。
  - ①福音の栄光を隠す必要はない。
  - ②福音の栄光は、消え去ることがない。
- (3) 顔の覆いの2つの意味
  - ①覆いは、消え去る栄光を隠す役割を果たした。
  - ②覆いは、イスラエルの民の顔に掛けられている。

#### 3. 14~15節

2Co 3:14 しかし、イスラエルの子らの理解は鈍くなりました。今日に至るまで、古い契約が 朗読されるときには、同じ覆いが掛けられたままで、取りのけられていません。それはキリ ストによって取り除かれるものだからです。

2Co 3:15 確かに今日まで、モーセの書が朗読されるときはいつでも、彼らの心には覆いが掛

## かっています。

- (1) モーセが顔に覆いを掛けたように、イスラエル人は心に覆いを掛けている。
  - ①イスラエル人が心に掛けている覆いは、「霊的な覆い」である。
  - ②旧約聖書はキリストを指し示しているが、彼らはその事実を理解できない。
  - ③同じ覆いが、今も会堂でモーセの律法の朗読を聞く人々の心に掛かっている。
  - ④この状況は、21世紀になった今も変わっていない。
  - ⑤この覆いは、キリストによって取り除かれるものである。

#### 4. 16 節

# 2Co 3:16 しかし、人が主に立ち返るなら、いつでもその覆いは除かれます。

- (1) モーセは、【主】に向く時に覆いを外した。
  - ①イスラエル人も、キリストに向けば、霊的覆いが取り除かれる。
  - ②霊的覆いとは、律法によって救われようとする頑迷さのことである。
  - ③主に立ち返るとは、イエスをメシアと信じることである。
  - ④信じるなら、旧約聖書がメシアを指し示していることが分かるようになる。

# 5. 17節

# 2Co 3:17 主は御霊です。そして、主の御霊がおられるところには自由があります。

- (1) 主イエスと聖霊は、同じように働かれる。
  - ①「主の御霊」とは、キリストの代理として働かれる聖霊である。
- (2)「主の御霊がおられるところには自由があります」
  - ①律法の束縛からの自由
  - ②旧約聖書の不鮮明な解釈からの自由
  - ③覆いなしに主の御顔を見ることができる自由

#### 6. 18節

2Co 3:18 私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

- (1) キリストを仰ぐ者は、顔の覆いなしに主と対面する。
  - ①その人は、鏡のように主の栄光を映しつつ、主と同じ姿に変えられていく。
  - ②この変化は、聖霊によるものである。
  - ③この変化は、時間をかけて徐々に起こる。

# Ⅱ. 大胆な奉仕の内容(4:1~6)

1. 1節

2Co 4:1 こういうわけで、私たちは、あわれみを受けてこの務めについているので、落胆することがありません。

- (1) 新しい契約に仕えることの特権
  - ①奉仕者は、あわれみを受けてその務めについている。
  - ②それゆえ、落胆することなく、大胆に福音を語るのである。

#### 2. 2節

2Co 4:2 かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず、 真理を明らかにすることで、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。

- (1) パウロは、偽教師たちとは正反対の奉仕を実践している。
  - ①恥となるような隠し事を捨てる。
  - ②ずる賢い歩みをしない。
  - ③神のことばを曲げない。
  - ④真理を明らかにする。
  - ⑤神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦する。

#### 3. 3~4節

2Co 4:3 それでもなお私たちの福音に覆いが掛かっているとしたら、それは、滅び行く人々に対して覆いが掛かっているということです。

2Co 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。

- (1) パウロは、誠実に、明快に、大胆に、福音を語っている。
  - ①それでも、福音に応答しない人たちがいる。
  - ②それは、神の責任でも、パウロの責任でもない。
  - ③彼らは滅び行く人々である。
  - ④彼らの顔には覆いが掛かっている。
- (2) その責任は、「この世の神」にある。
  - ①「この世の神」とは、悪魔である。
  - ②悪魔は、信じない者たちの思いを暗くしている。
  - ③福音の光を輝かせないようにしている。
    - \*神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音
    - \*父なる神の右に座しておられるキリストに関わる福音

## 4. 5節

2Co 4:5 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。

- (1) パウロの宣教
  - ①偽教師(ユダヤ主義者)のように、自分自身を宣べ伝えるのではない。
  - ②主なるイエス・キリストだけを宣べ伝える。
  - ③主イエスのしもべとして、コリントの信者たちに仕えている。

### 5. 6節

2Co 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る 知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

- (1) 最初の創造と新しい創造の対比
  - ①神は、「闇の中から光が輝き出よ」と言われた。
  - ②新しい創造においては、神ご自身が私たちの心の中で輝いてくださる。
  - ③最初の創造では、御霊が地の表を覆っていた。
  - ④新しい創造では、御霊が罪人を覆い、キリストに導かれる。
- (2) 新しく造られた者の使命
  - ①キリストの御顔には、神の栄光を知る知識がある。
  - ②そのキリストを伝えることが、信者の使命である。
  - ③ダマスコ途上で回心したパウロは、その使命を実行してきた。

# 結論:日本宣教について

## 1. 宣教の敵

(1) 2 = 1 4 : 4

2Co 4:4 彼らの場合は、この世の神が、信じない者たちの思いを暗くし、神のかたちであるキリストの栄光に関わる福音の光を、輝かせないようにしているのです。

- (2)「この世の神」とは、悪魔である。
- (3)「この世を支配する者」(ヨハ12:31、14:30、16:11)
  - ①「この世の神」の描写は、「この世を支配する者」である。
  - ②悪魔はイエスにこの世の栄華を差し出すことができた。 \*マタ4:8~10、ルカ4:5~8
  - ③悪魔は、アダムに与えられていた特権を奪った。
  - ④イエスは、悪魔がこの世の支配者であることを否定しなかった。

- (4) イエスは、悪魔に対する勝利を宣言された(ヨハ12:31)。 Joh 12:31 今、この世に対するさばきが行われ、今、この世を支配する者が追い出されます。
  - ①ゴルゴタの丘で、悪魔は裁かれた。
  - ②刑の執行はまだ行われていない。
  - ③それゆえ、「この世の神」は今も暗躍している。

## 2. 宣教の内容

(1) 2 = 1 4 : 2

2Co 4:2 かえって、恥となるような隠し事を捨て、ずる賢い歩みをせず、神のことばを曲げず、 真理を明らかにすることで、神の御前で自分自身をすべての人の良心に推薦しています。

- (2) 福音をそのまま伝える。
  - ①パウロは、偽教師たちとは正反対の奉仕を実践している。
  - ②神のことばを曲げない。
    - \*悪徳商人は、商品(ぶどう酒、金など)に混ぜ物をして売った。
    - \*偽教師たちは、神のことばに混ぜ物をした。
- (3) 混ぜ物をしない(不純物が混入している)。
  - ①聴衆を盛り上げるために、みことばに私的解釈を付け加えない。
  - ②文脈を無視して都合のよい聖句だけを取り出さない。

#### 3. 盲教の力

(1) 2 = 1 4:6

2Co 4:6 「闇の中から光が輝き出よ」と言われた神が、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせるために、私たちの心を照らしてくださったのです。

- (2) 最初の創造では、神は、「闇の中から光が輝き出よ」と言われた。
- (3) 新しい創造においては、神ご自身が私たちの心の中で輝いてくださる。
- (4) これが、信者に与えられた聖霊の内住である。
- (5) 聖霊の力によって栄光のキリストを伝えることが、信者の使命である。

# コリント人への手紙第二 6回 奉仕の本質の解説―宝を入れた土の器― 4:7~5:10

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
      - \*新しい契約に仕える祝福 (3:1~11)
      - \*大胆な奉仕(3:12~4:6)
      - \*宝を入れた土の器(4:7~5:10)
      - \*和解の奉仕(5:11~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、奉仕の本質について語る。
  - (2) キリスト教はパラドックスに満ちている。
    - ①イエスの死と復活が、パウロの奉仕を描写する比ゆとして用いられる。
    - ②パウロは、イエスの死を体験すると同時に、イエスの復活も体験している。
- 3. アウトライン:宝を入れた土の器 (4:7~5:10)
  - (1) 福音と福音の伝達者の対比(4:7~15)
  - (2) 外なる人と内なる人の対比(4:16~18)
  - (3) 地上の住まいと永遠の住まいの対比 (5:1~10)
- 4. 結論
  - (1) ギデオンの体験(士7章)
  - (2) 苦難の意味
  - (3) 苦難を乗り越える希望

## キリスト教のパラドックスについて学ぶ。

- I. 福音と福音の伝達者の対比 (4:7~15)
  - 1. 7節

2Co 4:7 私たちは、この宝を土の器の中に入れています。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものではないことが明らかになるためです。

- (1) 宝(宝石) とそれを入れている土の器の対比
  - ①宝とは、福音のメッセージである。
  - ②土の器とは、福音を伝える人間である。
  - ③この対比は、驚くべきものである。
- (2) 神が人間に福音の伝達を委ねた理由
  - ①福音の力は、神のものである。
  - ②メッセージ以上にメッセンジャーが輝くのは異常である。
    - (ILL) 皿と料理の関係、額縁と絵の関係、宝石箱と宝石の関係

## 2. 8~9節

2Co 4:8 私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方に暮れますが、行き詰まることはありません。

2Co 4:9 迫害されますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

- (1)「私たちは四方八方から苦しめられますが、窮することはありません」
  - ①福音の敵が多くいて、妨害してくる。
  - ②しかし、福音を語れなくなるということはない。
- (2)「途方に暮れますが、行き詰まることはありません」
  - ①不可能と思われるような状況に置かれても、道は開かれる。
- (3)「迫害されますが、見捨てられることはありません」
  - ①福音の敵からの攻撃にさらされるが、神から見放されることはない。
- (4)「倒されますが、滅びません」
  - (1)肉体的に傷を負っても、福音伝達のために立ち上がることができる。

#### 3. 10節

2Co 4:10 私たちは、いつもイエスの死を身に帯びています。それはまた、イエスのいのちが 私たちの身に現れるためです。

- (1) 福音の使者は、イエスの足跡をたどる。
  - ①彼らは、日々死ぬような体験をする。
  - ②その彼らの身に、イエスのいのちが現れる。

③イエスのいのちとは、復活し、天に昇ったイエスのいのちである。

#### 4. 11 節

2Co 4:11 私たち生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。それはまた、イエスのいのちが私たちの死ぬべき肉体において現れるためです。

- (1) 福音の使者が苦難に遭うのは、神が採用される普通の方法である。
  - ①人間的には、苦難は歓迎できない。
  - ②しかし神は、苦難に遭うしもべたちを通して、イエスのいのちを可視化される。

#### 5. 12 節

2Co 4:12 こうして、死は私たちのうちに働き、いのちはあなたがたのうちに働いているのです。

- (1) これまで述べたことの要約
  - ①パウロのコリント宣教には、死ぬような苦しみが伴った。
  - ②その結果、コリントの信者たちは福音を聞き、信じて救われた。
  - ③パウロの苦難が、コリントの信者たちにいのちをもたらした。

## 6. 13~14節

2Co 4:13 「私は信じています。それゆえに語ります」と書かれているとおり、それと同じ信仰の霊を持っている私たちも、信じているゆえに語ります。

2Co 4:14 主イエスをよみがえらせた方が、私たちをもイエスとともによみがえらせ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださることを知っているからです。

- (1) パウロは、詩篇 116篇 10節を引用する。
  - ①苦難の中でも語り続けるのは、信仰を持っているからである。
- (2) 信仰の内容
  - ①主イエスをよみがえらせた方が、信者をよみがえらせてくださる。
  - ②パウロとコリントの信者たちは復活し、ともに御前に立つようになる。

#### 7. 15 節

2Co 4:15 すべてのことは、あなたがたのためであり、恵みがますます多くの人々に及んで感謝が満ちあふれ、神の栄光が現れるようになるためなのです。

- (1) パウロが宣教を止めない理由は、神の栄光にある。
  - ①パウロの苦難は、コリントの信者たちに祝福をもたらす。
  - ②より多くの人が救われると、彼らの間に感謝が満ちあふれるようになる。

③感謝が満ちあふれると、神の栄光が現われる。

## Ⅱ. 外なる人と内なる人の対比(4:16~18)

1. 16 節

2Co 4:16 ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

- (1) 落胆しない理由
  - ①復活信仰により、よみがえりの希望を持っている。
- (2) 福音の使者が体験するパラドックス
  - ①外なる人(肉体)は衰えていく。
  - ②内なる人(魂)は日々新たにされている。

## 2. 17節

2Co 4:17 私たちの一時の軽い苦難は、それとは比べものにならないほど重い永遠の栄光を、 私たちにもたらすのです。

- (1) 麗しい対比がここにある。
  - ①地上の苦難は、「一時の軽い苦難」である。
    - \*パウロの苦難は、軽い苦難ではなかった。
    - \*しかし、ある対比を前提にすれば、その意味が分かる。
  - ②復活のいのちは、「重い永遠の栄光」である。
    - \*それは、地上の苦難とは比べものにならないものである。

#### 3. 18 節

2Co 4:18 私たちは見えるものにではなく、見えないものに目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に続くからです。

- (1) さらに対比が続く。
  - ①「見えるもの」とは、パウロが経験している苦難である。 \*それらのものは一時的であり、目を留めるべきものではない。
  - ②「見えないもの」とは、将来与えられる祝福である。 \* キリストの栄光、他の信者たちの祝福、御座の裁きで受ける報奨など

## Ⅲ. 地上の住まいと永遠の住まいの対比(5:1~10)

1. 1節

2Co 5:1 たとえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建

# 物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。

- (1) 聖書が教える死生観
  - ①私たちの肉体は、地上生涯に適したものである。
    - \*肉体は、「地上の住まいである幕屋(天幕)」である。
    - \*天幕は、旅人のための住まいである。
    - \*天幕が壊れるとは、肉体的に死ぬことである。
  - ②死後、天での生活に適した「永遠の住まい」が与えられる。
    - \*「人の手によらない」とは、被造世界の一部ではないという意味である。

#### 2. 2~3節

2Co 5:2 私たちはこの幕屋にあってうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。

2Co 5:3 その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態でいることはありません。

- (1) 私たちのうめき
  - ①制約の多い天幕を脱ぎ、天から与えられる住まいを着ることを切望している。
- (2) 信者が死ぬとどうなるか。
  - ①肉体は葬られ、朽ちていく。
  - ②魂は神のもとに行き、神の臨在を喜ぶ生活に入る。
  - ③携挙の時に、復活のからだが与えられる。

#### 3. 4節

2Co 5:4 確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負ってうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって呑み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。

- (1) 地上の肉体を持っている間、私たちはうめいている。
  - ①死にたいからではなく、復活のいのちを得たいからである。
  - ②天からの住まいを着るとは、死ぬべき肉体がいのちによって吞み込まれること。

#### 4. 5節

2Co 5:5 そうなるのにふさわしく私たちを整えてくださったのは、神です。神はその保証として御霊を下さいました。

- (1) 神が私たちのために立てた計画のゴールは、天からの住まいを上に着ること。
  - ①そのことの保証となるのは、御霊である。
  - ②信者には、内住の御霊が与えられている。

#### 5. 6~8節

2Co 5:6 ですから、私たちはいつも心強いのです。ただし、肉体を住まいとしている間は、私たちは主から離れているということも知っています。

2Co 5:7 私たちは見えるものによらず、信仰によって歩んでいます。

2Co 5:8 私たちは心強いのですが、むしろ肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよいと思っています。

- (1) 肉体を離れて、主のみもとに住むほうがよい。
  - ①しかし、肉体を住まいとする生活に意味があるなら、それに甘んじる。
  - ②その生活は、信仰による歩みである。
  - ③見えるものによらず、神のことばを信じて歩んでいるからである。

## 6. 9~10節

2Co 5:9 そういうわけで、肉体を住まいとしていても、肉体を離れていても、私たちが心から 願うのは、主に喜ばれることです。

2Co 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。

- (1) パウロの願いは、主に喜ばれることである。
  - ①地上生涯を送っていても、キリストの御座の裁きの前に立たされたときも
    - \*救いは、恵みと信仰による。
    - \*報奨は、信者として行った奉仕による。

# 結論:

1. ギデオンの体験(士7:19~21)

Jdg 7:19 真夜中の夜番が始まるとき、ギデオンと、彼と一緒にいた百人の者が陣営の端に着いた。ちょうどそのとき、番兵が交代したばかりであったので、彼らは角笛を吹き鳴らし、その手に持っていた壺を打ち壊した。

Jdg 7:20 三隊の者が角笛を吹き鳴らして、壺を打ち砕き、左手にたいまつを、右手に吹き鳴ら す角笛を固く握って「【主】のため、ギデオンのための剣」と叫んだ。

Jdg 7:21 彼らはそれぞれ持ち場に立ち、陣営を取り囲んだので、陣営の者はみな走り出し、大声をあげて逃げた。

- (1) パウロの頭にあったのは、この記事である。
- (2) 300人のギデオンの兵士たちは、たいまつを入れた壺を打ち砕いた。
- (3) 壺が打ち砕かれて初めて、たいまつが輝き出る。

# 2024年9月1日(日) 2コリ4:7~5:10 宝を入れた土の器

# 2. 苦難の意味

- (1) 苦難は、土の器(主のしもべ)を砕くための神の方法である。
- (2) 苦難がないほうが、より奉仕ができると考えるのは、人間の思いである。
- (3) 神の知恵は、正反対のことを教えている。
  - ①病、悲しみ、苦難、迫害、抑圧など
  - ②土の器が砕かれたとき、福音の光が輝き出る。

# 3. 苦難を乗り越える希望

- (1) 地上の天幕を着た生活 (グッド)
  - ①信者として主に仕える生活
- (2) 地上の幕屋を脱いだ生活 (ベター)
  - ①肉体は葬られ、朽ちていく。
  - ②魂は神のもとに行き、神の臨在を喜ぶ生活に入る。
- (3) 永遠の住まいを着る生活 (ベスト)
  - ①携挙の時に、復活のからだが与えられる。
  - ②キリストから報奨が与えられる。

# コリント人への手紙第二 7回 奉仕の本質の解説―和解の奉仕― 5:11~6:10

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
      - \*新しい契約に仕える祝福 (3:1~11)
      - \*大胆な奉仕(3:12~4:6)
      - \*宝を入れた土の器(4:7~5:10)
      - \*和解の奉仕(5:11~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、神への奉仕の本質について語っている。
  - (2) パウロの奉仕は、聖霊に導かれた奉仕である。
  - (3) パウロは、コリントの信者たちが彼の奉仕を手本にすることを願う。
- 3. アウトライン:和解の奉仕
  - (1) キリストの愛 (5:11~15)
  - (2) 新しく造られた者 (5:16~17)
  - (3) 和解の務め (5:18~21)
  - (4) キリストの使節(6:1~10)
- 4. 結論:奉仕の原動力

# パウロの奉仕の姿勢について学ぶ。

- I. キリストの愛(5:11~15)
  - 1. 11 節

2Co 5:11 そのため、主を恐れることを知っている私たちは、人々を説得しようとしています。 私たちのことは、神の御前に明らかです。しかしそれが、あなたがたの良心にも明らかにな ることが、私の望みです。

- (1) パウロの奉仕の根底にあるのは、「主への恐れ」である。
  - ①「【主】を恐れることは知識の初め。愚か者は知恵と訓戒を蔑む」(箴1:7)
  - ②主への畏怖の念が彼を駆り立てている。
  - ③彼が全力で人々を説得しようとしていることは、神がよくご存じである。
  - ④パウロは、コリントの信者たちが同じ理解に至ることを願っている。

## 2. 12節

2Co 5:12 私たちは、またしてもあなたがたに自分を推薦しているのではありません。むしろ、 あなたがたに私たちのことを誇る機会を与え、心ではなくうわべを誇る人たちに応じられる ようにしたいのです。

- (1) コリントの信者の中には、パウロを誤解する者たちがいた。
  - ①パウロは、その誤解(自己推薦)をただちに解く。
  - ②パウロが自分の奉仕について長々と書くのは、自己推薦のためではない。
  - ③コリントの信者たちに、敵に対する弁明の方法を教えるためである。
- (2) パウロを批判するのは、偽教師たちである。
  - ①彼らは、「心ではなくうわべを誇る人たち」である。
  - ②つまり、内面を整えるよりも、外面をつくろうことに興味がある人たちである。

#### 3. 13 節

2Co 5:13 私たちが正気でないとすれば、それは神のためであり、正気であるとすれば、それはあなたがたのためです。

- (1) 敵対者の目には、パウロが正気でないように見える。
  - ①パウロの神への献身は、それほど真剣で深いものである。
  - ②しかしパウロは、正気を失っているわけではない。
  - ③パウロが熱心に奉仕する理由は、コリントの信者たちを育てるためである。
  - (4)パウロに利己的な動機は全くない。

## 4. 14~15 節

2Co 5:14 というのは、キリストの愛が私たちを捕らえているからです。私たちはこう考えました。一人の人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのである、と。 2Co 5:15 キリストはすべての人のために死なれました。それは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためです。

- (1) パウロを動かしているのは、キリストの愛である。
  - ①キリストは、人類の代表として、すべての人のために死なれた。

- ②つまり、キリストにあって、すべての人が死んだのである。
- ③なぜキリストはすべての人のために死なれたのか。
- ④信じる者が、「自分のために死んでよみがえった方」のために生きるため。

## Ⅱ. 新しく造られた者(5:16~17)

1. 16節

2Co 5:16 ですから、私たちは今後、肉にしたがって人を知ろうとはしません。かつては肉にしたがってキリストを知っていたとしても、今はもうそのような知り方はしません。

- (1) キリストを信じた者は、新しく造られた者である。
  - ①新しく造られた者は、新しい視点で人やものごとを見るようになる。
  - ②外面によってではなく、内面の実質によって、人を知るようになる。
  - ③キリストに関しても、同じことが言える。
  - ④信じる前は、イエスを人間として見ていたが、今は違う。
  - ⑤イエスは、復活し昇天した栄光の主である。

#### 2. 17 節

2Co 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。 古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

- (1) キリストを信じた人は、「新しく造られた者」である。
  - ①キーワードは、「キリストのうちにあるなら」(in Christ) である。
  - ②クリスチャンになった途端に、罪の性質や悪癖が取り除かれるわけではない。
  - ③しかし、キリストにあっては、そのことが起こったと見なされる。
  - ④それが信者の内に成就するためには、時間が必要である(聖霊による聖化)。

## Ⅲ. 和解の務め(5:18~21)

1. 18~19節

2Co 5:18 これらのことはすべて、神から出ています。神は、キリストによって私たちをご自分と和解させ、また、和解の務めを私たちに与えてくださいました。

2Co 5:19 すなわち、神はキリストにあって、この世をご自分と和解させ、背きの責任を人々に負わせず、和解のことばを私たちに委ねられました。

- (1) 神は、これらの祝福の作者である。
  - ①人間の側に誇るべきものは何もない。
  - ②神は、キリストによって私たちをご自分と和解させた。 \*人間が神と和解するのである。
  - ③神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させた。

- ④神は、背きの責任を人々に負わせなかった。
  - \*このことは、キリストを信じた瞬間に起こることである。
- ⑤神は、和解のことば(福音)をしもべたちに委ねられた。
  - \*この務めは、天使たちにではなく、人間に委ねられた。

# 2. 20節

2Co 5:20 こういうわけで、神が私たちを通して勧めておられるのですから、私たちはキリストに代わる使節なのです。私たちはキリストに代わって願います。神と和解させていただきなさい。

- (1) パウロが各地で実践してきた宣教の内容
  - ①パウロは、キリストに代わる使節(大使)である。
  - ②神がパウロを通して勧めておられる。
    - \*神が膝をついて懇願しておられるようである。
  - ③パウロは、キリストの思いを代弁している。
  - ④「神と和解させていただきなさい」
    - \*受動態の命令文である。神は、できることをすべて行われた。
    - \*福音を信じることは、神の和解を受け入れることである。

## 3. 21 節

2Co 5:21 神は、罪を知らない方を私たちのために罪とされました。それは、私たちがこの方にあって神の義となるためです。

- (1) 十字架上で起こったこと
  - ①神は、罪を知らないキリストを私たちのために罪とされた。
  - ②人間の罪がキリストに転嫁されたということである。
  - ③その結果、キリストの義が人間の上に転嫁された。

## IV. キリストの使節としての心構え (6:1~10)

1. 1節

2Co 6:1 私たちは神とともに働く者として、あなたがたに勧めます。神の恵みを無駄に受けないようにしてください。

- (1) パウロからコリントの信者たちへの勧告(未信者への勧告でもある)
  - ①「神の恵みを無駄に受けないようにしてください」
  - ②偽教師(ユダヤ主義者)の教えに惑わされ、パウロの教えを疑うこと
  - ③救いは恵みと信仰によってのみ与えられるという教えを疑うこと

## 2. 2節

2Co 6:2 神は言われます。/「恵みの時に、わたしはあなたに答え、/ 救いの日に、あなたを助ける。」/見よ、今は恵みの時、今は救いの日です。

- (1) イザ49:8からの引用
  - ①「救いの日に、あなたを助ける」とは、キリストの復活のことである。
  - ②イザヤが預言していた恵みの時、救いの日は到来した。
  - ③それゆえ、今こそ福音を信じるべきである。

#### 3. 3節

2Co 6:3 私たちは、この務めがそしられないように、どんなことにおいても決してつまずきを与えず、

- (1) 不信仰の口実を与えないために、パウロは自らの生活を律する。
  - ①「この務め」とは、主のしもべとしての奉仕である。
  - ②すべてのクリスチャンが、そのような奉仕に召されている。

#### 4. 4~5節

2Co 6:4 むしろ、あらゆることにおいて、自分を神のしもべとして推薦しています。すなわち、 苦難にも苦悩にも困難にも、

2Co 6:5 むち打ちにも入獄にも騒乱にも、疲れ果てた時も眠れない時も食べられない時も、大いなる忍耐を働かせて、

- (1) 4~5節は、神のしもべとしてパウロが耐えた肉体的な苦しみである。
  - ①苦難、苦悩、困難、むち打ち、入獄、騒乱
  - ②疲れ果てた時、眠れない時、食べられない時

#### 5. 6~7 節

2Co 6:6 また、純潔と知識、寛容と親切、聖霊と偽りのない愛、

2Co 6:7 真理のことばと神の力により、また左右の手にある義の武器によって、

- (1) 6~7節は、パウロが示した善行である。
  - ①純潔、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛
  - ②真理のことば、神の力、左右の手にある義の武器(防御と攻撃のための武器)

#### 6. 8~10 節

2Co 6:8 また、ほめられたりそしられたり、悪評を受けたり好評を博したりすることによって、 自分を神のしもべとして推薦しているのです。私たちは人をだます者のように見えても、真 実であり、 2Co 6:9 人に知られていないようでも、よく知られており、死にかけているようでも、見よ、 生きており、懲らしめられているようでも、殺されておらず、

2Co 6:10 悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持っていないようでも、すべてのものを持っています。

- (1) 8~10 節は、信者が通過する矛盾した経験である(谷と高嶺の体験)。
  - ①人をだます者のように見えても、真実である。
  - ②人に知られていないようでも、よく知られている。
  - ③死にかけているようでも、見よ、生きている。
  - ④懲らしめられているようでも、殺されていない。
  - ⑤悲しんでいるようでも、いつも喜んでいる。
  - ⑥貧しいようでも、多くの人を富ませている。
  - ⑦何も持っていないようでも、すべてのものを持っている。

# 結論:奉仕の原動力

- 1. 主への恐れ (5:11)
  - (1) 神は全知全能で、すべてをご存じである。
  - (2) 神への畏怖の念があるなら、地上には恐れるものがなくなる。
  - (3) 人生の唯一のゴールは、神に喜ばれることである。
- 2. キリストの愛 (5:14)
  - (1) ピリ2:6~8

Php 2:6 キリストは、神の御姿であられるのに、/神としてのあり方を捨てられないとは考えず、

Php 2:7 ご自分を空しくして、しもべの姿をとり、/人間と同じようになられました。/人としての姿をもって現れ、

Php 2:8 自らを低くして、死にまで、/それも十字架の死にまで従われました。

- (2) キリストを信じる者は、自分のためでなく、キリストのために生きる。
- 3. キリストの使節としての自己認識 (5:20)
  - (1) クリスチャンは、和解のことばを伝える神の国の大使である。
  - (2) 大使には、派遣国の意向を正確に伝える責務がある。
- 4. 恵みの時 (6:2)
  - (1) 今は、イザヤが預言していた恵みの時である。
  - (2) 今こそ、福音を信じる時である。
  - (3) 先延ばしにする人は、信じないままで終わることが多い。

# コリント人への手紙第二 8回 信頼回復の訴え一開かれた心一 6:11~7:4

#### はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
      - \*広く開かれた心(6:11~7:4)
      - \*パウロの喜び (7:5~16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、信頼回復を訴えてきた。
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答の最後は、極めて感情的なものである。
  - (3) パウロは、愛と憤りを包み隠さず表現する。
- 3. アウトライン:広く開かれた心
  - (1) パウロの訴え (6:11~13)
  - (2) 偶像との決別(6:14~7:1)
  - (3) 2度目の訴え (7:2~4)
- 4. 結論:つり合わないくびき

## パウロの訴えについて学ぶ。

- I. パウロの訴え (6:11~13)
  - 1. 11~12節

2Co 6:11 コリントの人たち、私たちはあなたがたに対して率直に話しました。私たちの心は広く開かれています。

2Co 6:12 あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くなってはいません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。

- (1) パウロは、コリントの信者に対して心を開くようにとアピールする。
  - ①ここから感情的なことばが始まる。

- ②パウロは、コリントの信者たちに対して率直に愛を語った。
- ③ことばは、心にあるものを外に表現する。
- ④パウロの心は、広く開かれている。
- ⑤問題は、コリントの信者たちの側にある。
- (2) 愛の心に差がある。
  - ①コリント人たちに対するパウロの愛は、狭くなっていない(変化していない)。
  - ②両者の間に壁があるとするなら、問題はコリント人たちの側にある。
  - ③心が十分に開かれていないので、彼らはパウロを受け入れることができない。

## 2. 13節

2Co 6:13 私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。

- (1) 親子の間にある愛が例に取られる。
  - ①パウロは、彼らをキリストに導いた霊的父である。
  - ②パウロは、父が子に語るように、真実を余すところなく語る。
- (2) 父は子に、愛を要求することはできない。
  - ①子が愛を示してくれることを期待するだけである。
  - ②パウロは、コリント人たちが愛を示してくれることを期待している。
  - ③パウロは、それがすぐに実現しない理由は、中途半端な信仰にあると見ている。

## Ⅱ. 偶像との決別(6:14~7:1)

1. 14~15 節

2Co 6:14 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。正義と不法に何の関わりがあるでしょう。光と闇に何の交わりがあるでしょう。

2Co 6:15 キリストとベリアルに何の調和があるでしょう。信者と不信者が何を共有しているでしょう。

- (1) 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはならない。
  - ①信者と不信者は、信仰も、世界観も、人生観も大いに異なる。
  - ②この教えは、重大な決断を下す際のガイドラインとなる (結婚、職業、教会)。
- (2) 5 つの修辞的疑問文(①~④)
  - ①「正義と不法に何の関わりがあるでしょう」
    - \*人間の行為には、道徳的に正しいこととそうでないことがある。

- ②「光と闇に何の交わりがあるでしょう」 \*光が灯ると、闇は消える。
- ③「キリストとベリアルに何の調和があるでしょう」 \*キリストとベリアル(悪魔)は、支配権をめぐって戦っている。
- ④「信者と不信者が何を共有しているでしょう」 \*霊的に生きている者と霊的に死んでいる者は、共有するものがない。

## 2. 16節

2Co 6:16 神の宮と偶像に何の一致があるでしょう。私たちは生ける神の宮なのです。神がこう言われるとおりです。/「わたしは彼らの間に住み、また歩む。/わたしは彼らの神となり、/彼らはわたしの民となる。

- (1) 5 つの修辞的疑問文(⑤)
  - ⑤「神の宮と偶像に何の一致があるでしょう」
    - \*信者は神の宮である。
    - \*それゆえ、信者が偶像礼拝に関係することはあり得ないことである。
    - \*偶像とは、キリストよりも大切にしているものすべてである。
    - \*出29:45、レビ26:12、エゼ37:27

#### 3. 17~18節

2Co 6:17 それゆえ、彼らの中から出て行き、/彼らから離れよ。/――主は言われる――/ 汚れたものに触れてはならない。/そうすればわたしは、あなたがたを受け入れ、 2Co 6:18 わたしはあなたがたの父となり、/あなたがたはわたしの息子、娘となる。/――全能の主は言われる。」

- \*イザ52:11
- \*この聖句は、この世からの分離を命じている。
- \*神の息子、娘になるとは、この世から分離することである。
- \*これは、信者同士の交わりからの分離ではない。
- \*キリストが歓迎されない交わりからの分離である。
- \*そのような分離は、父なる神とのより親密な交わりをもたらす。

#### 4. 1節

2Co 7:1 愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。

- (1) 14 節から始まったパラグラフのまとめである。
  - ①このような約束とは、神の息子、娘になるという約束である。

- ②それゆえ、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめるべきである。
- ③聖化は、地上生涯の間に完成するものではない。
- ④聖化の原動力は、神への畏怖の念である。

#### Ⅲ. 2度目の訴え (7:2~4)

1. 2節

2Co 7:2 私たちに対して心を開いてください。私たちはだれにも不正をしたことがなく、だれも滅ぼしたことがなく、だれからもだまし取ったことがありません。

- (1) コリントの信者たちは、パウロに対して心を開くことができるはずである。
  - ①パウロは、だれにも不正をしたことがない。
  - ②だれも滅ぼしたことがない。
  - ③だれからもだまし取ったことがない。

## 2. 3節

2Co 7:3 私はあなたがたを責めるために言っているのではありません。前にも言ったように、 あなたがたは、私たちとともに死に、ともに生きるために、私たちの心のうちにあるので す。

- (1) パウロには、コリントの信者を責める気持ちはない。
  - ①彼らに対するパウロの愛は、不変である。
  - ②パウロには、彼らと生死をともにするという覚悟がある。

#### 3. 4節

2Co 7:4 私には、あなたがたに対する大きな確信があり、あなたがたについて大きな誇りがあります。私は慰めに満たされ、どんな苦難にあっても喜びに満ちあふれています。

- (1) パウロは、コリントの信者を信頼している。
  - ①大きな確信がある。
  - ②大きな誇りがある。
  - ③出かけた先々で、コリントの信者の自慢をしている。
- (2) 今パウロは、慰めに満たされている。
  - ①どんな苦難にあっても喜びに満ちあふれている。
  - ②慰めと喜びの理由は、これ以降の聖句で明らかになる。
  - ③テトスが良き知らせを持ってパウロのもとに来た。
  - ④愛する者(コリントの信者)の立ち直りこそ、喜びの源である。

#### 結論:つり合わないくびき

- 1. パウロは、分離の重要性を教えている。
  - (1) コリントの信者は、不十分な分離しか実行していなかった。
  - (2) それが、パウロに対して心を開けなかった理由である。
  - (3) 申 22:10

Deu 22:10 牛とろばとを組にして耕してはならない。

(4) マタ11:28~30

Mat 11:28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。

Mat 11:29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、 わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。

Mat 11:30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」

(5) 2 = y 6:14a

2Co 6:14 不信者と、つり合わないくびきをともにしてはいけません。

- ①正義と不法、②光と闇、③キリストとベリアル
- ④信者と不信者、⑤神の宮と偶像

## 2. 教会の霊的純粋性

- (1) 教会内に新生していない名目だけの信者が多くいる場合、注意が必要である。
- (2) 教会で福音の真理が語られない場合、黙ってそこを去る。
- (3) 霊的妥協は、信仰の崩壊につながる。

# 3. 結婚生活

- (1) 信者は不信者と結婚すべきではない。
  - ①家庭の一致
  - ②神の民としての使命
  - ③信仰の継承
- (2) しかし、すでに不信者と結婚しているなら、離婚すべきではない。
- (3) 相手が救われることを前提に、生活を続けるべきである (1 コリ 7:12~16)。

## 4. 社会生活

- (1) 不信者との交わりは、霊的・道徳的リスクをもたらす。
- (2) 信者は、この世に生きながら、この世のものではない。
- (3) 不信者と交わる理由は、福音を伝えるためである。
- (4) 不信者をビジネスのパートナーにするのは危険なことである。

# コリント人への手紙第二 9回 信頼回復の訴えーパウロの喜びー 7:5~16

## はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
    - ①計画変更についての弁明 (1:12~2:17)
    - ②奉仕の本質の解説 (3:1~6:10)
    - ③信頼回復の訴え (6:11~7:16)
      - \*広く開かれた心(6:11~7:4)
      - \*パウロの喜び (7:5~16)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、信頼回復を訴えてきた。
  - (2) 最後にパウロは、極めて感情的なことばを語る。
  - (3) パウロの愛と憤りが、率直に表現される。
  - (4) コリントの信者たちの正しい応答が、パウロに喜びをもたらす。
- 3. アウトライン:パウロの喜び (7:5~16)
  - (1) テトスの報告 (7:5~13a)
  - (2) テトスの体験 (7:13b~16)
- 4. 結論:悔い改めと後悔の違い

#### パウロの喜びについて学ぶ。

- I. テトスの報告 (7:5~13a)
  - 1. 5節

2Co 7:5 マケドニアに着いたとき、私たちの身には全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいました。外には戦いが、内には恐れがありました。

- (1) パウロの旅 (2 コリ 2:13 の続き)
  - ①エペソ→トロアス (テトスに会う予定であった)
  - ②トロアスで伝道の門戸が開かれたが、マケドニアに向った(2コリ2:12~13)。
  - ③マケドニアに着いても、平安が与えられなかった。

- (2) テトスに会えなかったことが不安の原因である。
  - (1)コリント教会の霊的状態は、どうだろうか。
  - ②「涙ながらに書いた手紙」(2コリ2:4) は、受け入れられただろうか。
  - ③テトスは歓迎されただろうか。
- (3) 困難な状況に置かれると、誰もが外面的にも内面的にも、平安を失う。
  - ①外には敵からの攻撃があった。
  - ②内には恐れがあった。
  - ③パウロは、全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいた。

## 2. 6~7節

2Co 7:6 しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テトスが来たことで私たちを慰めてくださいました。

2Co 7:7 テトスが来たことだけでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められました。私を慕うあなたがたの思い、あなたがたの深い悲しみ、私に対する熱意を知らされて、私はますます喜びにあふれました。

- (1) しかし、神は時宜に適った慰めを与えてくださった。
  - ①2つの慰めが与えられた。
- (2) 慰め 1: テトスと会うことができた。
  - ①信仰の友との交わりには、喜びがある。
  - ②同労者との交わりには、力がある。
- (3) 慰め2:テトスが朗報をもたらしてくれた。
  - ①テトスは、コリント教会から歓迎され、慰めを受けた。
  - ②コリントの信者たちは、パウロを慕っている。
  - ③彼らは、あの手紙を読み、自らの罪を深く悲しんだ。
  - ④彼らは、パウロを喜ばせたいと心から願った。

#### 3. 8~9節

2Co 7:8 あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、私は後悔していません。あの手紙が一時的にでも、あなたがたを悲しませたことを知っています。それで後悔したとしても、

2Co 7:9 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからで

す。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちから何の害も受けなかったのです。

- (1)「あの手紙」を書いた後のパウロの複雑な心情
  - ①「あの手紙」は、罪を叱責する厳しい手紙であった。
  - ②それを読んだコリントの信者たちは、悲しみや痛みを覚えるはずである。
  - ③それを思うと、後悔したくもなる。
  - ④しかし、クリスチャンの愛とは、相手の益を願って真実を語ることである。
  - ⑤パウロは、「あの手紙」を書いたことを今は喜んでいる。
  - ⑥パウロは、霊的外科医の役割を果たしている。

# (2) 喜びの理由

- ①彼らが、悲しんで悔い改めたからである。 \*悔い改めとは、罪から離れ、神に立ち返ることである。
- ②彼らは、神の御心に添って悲しんだ。
  \*この悔い改めは、神に喜ばれるものである。
- ③その結果、パウロから更なる叱責を受けなくてもよくなった。

## 4. 10節

2Co 7:10 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。

- (1)「神のみこころに添った悲しみ」
  - ①罪を犯した後に感じる悲しみは、その人を悔い改めに導く。
  - ②その人は、神が自分に語っておられることを認識する。
  - ③神に喜ばれる悔い改めは、後悔のないものである。
  - ④それは「救いに至る悔い改め」である。
    - \*この救いは、永遠のいのちに至る救いではない。
    - \*この救いは、罪の結果からの救い、罪の束縛からの救いである。
- (2)「世の悲しみ」
  - ①この悲しみは、単なる後悔である。
  - ②この悲しみは、苦々しい思い、頑なな思い、失望、そして死をもたらす。

## 5. 11節

2Co 7:11 見なさい。神のみこころに添って悲しむこと、そのことが、あなたがたに、どれほどの熱心をもたらしたことでしょう。そればかりか、どれほどの弁明、憤り、恐れ、慕う思

い、熱意、処罰をもたらしたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちが すべての点で潔白であることを証明しました。

- (1) コリントの信者たちは、神の御心に添って悲しんだ。
  - ①その結果、多くの祝福を得た。
- (2) 祝福 1: 熱心、弁明、憤り、恐れ、慕う思い、熱意、処罰 ①罪を犯した人に無関心であったが、熱心に問題解決に取り組むようになった。
- (3) 祝福2:自分たちがすべての点で潔白であることを証明した。
  - ①神の御心の添った悔い改めには、行動が伴う。
  - ②彼らは、問題解決のために必要なことをすべて行った。

## 6. 12~13 節 a

2Co 7:12 ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは不正を行った人のためでも、その被害者のためでもなく、私たちに対するあなたがたの熱心が、あなたがたのために神の御前に明らかにされるためだったのです。

2Co 7:13a こういうわけで、私たちは慰めを受けました。

- (1) パウロが手紙を書いた目的
  - ①不正を行った人の為ではない(1コリ5章の義理の母を妻にしている者)。
  - ②その被害者のためでもない(その者の父)。
  - ③コリントの信者たちが熱心にパウロを慕っていることが明らかにされるため。 \*そのことは、神の御前に明らかにされた。
- (2) この手紙の目的が達成されたので、パウロは慰めを受けた。
  - ①それだけではなく、テトス自身の体験からも慰めを受けた。

## II. テトスの体験(7:13b~16)

1. 13節b

2Co 7:13b この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テトスの心が、あなたがたすべてによって安らいでいたからです。

- (1) テトスが体験した喜びが、パウロに更なる喜びを増し加えた。
  - ①テトスは、コリントの信者に受け入れられた。
  - ②彼は、コリントの信者との交わりを通して、励ましと安らぎを得た。

## 2. 14 節

2Co 7:14 私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずにすみました。むしろ、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスの前で誇ったことも真実となったのです。

- (1) パウロは、テトスを派遣する前に、コリントの信者のことを誇った。
  - ①テトスがそのとおりのことを体験したので、パウロは恥をかかずにすんだ。
- (2) それどころか、テトスの前で誇ったことも真実となった。
  - ①パウロは、常に真実を語ってきた。
  - ②今回も、パウロが真実を語っていることが証明された。

#### 2. 15 節

2Co 7:15 テトスは、あなたがたがみな従順で、どのように恐れおののきながら自分を迎えてくれたかを思い起こし、あなたがたへの愛情をますます深めています。

- (1) テトスの体験
  - ①彼は、どのようなもてなしを受けるか、知らなかった。
    - \*最悪の場合も想定していた。
  - ②しかし、コリントの信者たちはテトスを歓迎した。
    - \*「従順で」、「恐れおののきながら」は、神への畏怖の念の表現である。
  - ③この体験により、テトスは、コリントの信者への愛情をますます深めている。

## 3. 16節

2Co 7:16 私はすべてのことにおいて、あなたがたに信頼を寄せることができることを喜んでいます。

- (1) パウロがテトスに対して誇ったことは、間違いではなかった。
  - ①コリントの信者は、パウロの勧告に従った。
  - ②今後とも、パウロとコリントの信者の信頼関係は続く。
- (2) この聖句をもって、コリント人への手紙第二の前半が終わる。
  - ①パウロが自分の喜びについて書いたのは、信仰による行いを励ますためである。

## 結論:悔い改めと後悔の違い

- 1. ペテロの悔い改め
  - (1) ペテロは、イエスを三度否認した。
  - (2) その直後に、彼は深い悲しみと悔い改めに導かれた。
  - (3) マタ 26:75

Mat 26:75 ペテロは、「鶏が鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と言われたイエスのことばを思い出した。そして、外に出て行って激しく泣いた。

- (4) これが「神のみこころに添った」悔い改めである。
- (5) 彼は立ち直り、使徒としての使命を全うした。

# 2. ユダの悔い改め

- (1) ユダは、イエスを裏切ったことを後悔した。
- (2) 彼の悔い改めは、自己中心的なものであった。
- (3)「世の悲しみは死をもたらす」
- (4) マタ 27:3~5

Mat 27:3 そのころ、イエスを売ったユダはイエスが死刑に定められたのを知って後悔し、銀 貨三十枚を祭司長たちと長老たちに返して、言った。

Mat 27:4 「私は無実の人の血を売って罪を犯しました。」しかし、彼らは言った。「われわれの知ったことか。自分で始末することだ。」

Mat 27:5 そこで、彼は銀貨を神殿に投げ込んで立ち去った。そして出て行って首をつった。

# コリント人への手紙第二 10回 エルサレム教会への献金 (1) ーマケドニアの諸教会の例— 8:1~7

# はじめに

- 1. 文脈の確認
  - (1) イントロダクション (1:1~11)
  - (2) パウロを疑う者たちへの回答(1:12~7:16)
  - (3) エルサレム教会への献金 (8:1~9:15)
    - ①マケドニアの諸教会の例(8:1~7)
    - ②献げる動機 (8:8~15)
    - ③テトスの熱意 (8:16~24)
    - ④コリント訪問の予定 (9:1~5)
    - ⑤喜んで与える祝福 (9:6~15)
- 2. 注目すべき点
  - (1) パウロは、異邦人教会からの献金をエルサレム教会に届けようとした。
  - (2) 彼の熱心さの背後には、さまざまな理由があった。
- 3. アウトライン
  - (1) この献金が重要な理由
  - (2) マケドニアの諸教会の例 (8:1~7)
- 4. 結論:異邦人からユダヤ人への献金

## マケドニアの諸教会の例ついて学ぶ。

- I. この献金が重要な理由
  - 1. エルサレムの聖徒たちの貧困支援
    - (1) エルサレムの聖徒たちは貧しかった。
      - ①イエスを信じた者は、ユダヤ人社会から追放された。
      - ②ユダヤ教徒としての生活は、信仰を含む全分野に及んでいた。
      - ③ニコデモも職を失い、貧困の中で死んで行った。
    - (2) 激しい飢饉がユダヤを襲った。

①使 11:28

Act 11:28 その中の一人で名をアガボという人が立って、世界中に大飢饉が起こると御霊によって預言し、それがクラウディウス帝の時に起こった。

## Ⅱ. マケドニアの諸教会の例 (8:1~7)

1. 1節

2Co 8:1 さて、兄弟たち。私たちは、マケドニアの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと思います。

- (1) 神の恵みがマケドニアの諸教会に与えられた。
  - ①パウロは、このことをコリントの信者たちに知らせようとしている。
- (2) マケドニアとは、ギリシア北部のことである。
  - ①ピリピ教会とテサロニケ教会
  - ②ともにパウロの宣教によって誕生した教会である。
  - ③彼らが神の恵みを受けたことは、惜しみない献金によって表現された。

## 2. 2 節

2Co 8:2 彼らの満ちあふれる喜びと極度の貧しさは、苦しみによる激しい試練の中にあってもあるれ出て、惜しみなく施す富となりました。

- (1) マケドニアの信徒たちは困難な状況に置かれていた。
  - ①迫害と貧困で苦しんでいた。
  - ②このような場合、人は将来に備えて富を蓄えようとするものである。
- (2) しかし彼らは、予想外の行動を起こした。
  - (1)クリスチャン生活の喜びが苦難にまさったのである。
  - ②彼らは、惜しみなく献げた。

# 3. 3~4節

2Co 8:3 私は証しします。彼らは自ら進んで、力に応じて、また力以上に献げ、 2Co 8:4 聖徒たちを支える奉仕の恵みにあずかりたいと、大変な熱意をもって私たちに懇願しました。

- (1) パウロは、証言する。
  - ①彼らは、力に応じて献げただけではない。
  - ②彼らは、力以上に献げた。
  - ③しかも、強制されてではなく、自発的に献げた。

- (2) 最初パウロは、この献金を受け取ることを躊躇したようである。
  - ①しかし彼らは、パウロに懇願した。
  - ②エルサレムの聖徒たちを支える奉仕の恵みに与りたいと懇願した。

#### 4. 5節

2Co 8:5 そして、私たちの期待以上に、神のみこころにしたがって、まず自分自身を主に献げ、 私たちにも委ねてくれました。

- (1) マケドニアの諸教会の間に、パウロが期待した以上の霊的覚醒が起こった。
  - ①彼らは、まず主に対して献身した。
  - ②次に、パウロの教えに身を委ねた。 \*キリストの使節であるパウロへの従順を示した。
  - ③パウロが進めるエルサレムの聖徒たちへの献金に参加した。 \*主への献身は、献金という行為に先立つものである。

## 5. 6節

2Co 8:6 それで私たちは、テトスがこの恵みのわざをあなたがたの間で始めたからには、それを成し遂げるようにと、彼に勧めました。

- (1) 話題は、コリントの信者たちの状況に移る。
  - ①彼らは、迫害や貧困と戦っていたわけではない。
  - ②テトスは、前回のコリント訪問時に、この献金について教えていた。
  - ③しかし、コリントの信者たちは、その教えをまだ実行に移していなかった。
- (2) パウロは、コリントでもマケドニアと同じことが起こることを期待している。
  - ①パウロは、テトスが始めた恵みのわざを成し遂げるように、彼に勧めた。

#### 6. 7節

2Co 8:7 あなたがたはすべてのことに、すなわち、信仰にも、ことばにも、知識にも、あらゆる熱心にも、私たちからあなたがたが受けた愛にもあふれています。そのように、この恵みのわざにもあふれるようになってください。

- (1) コリントの信者たちのすぐれた点が列挙される。
  - ①信仰。これは御霊の賜物としての信仰である。
  - ②異言。1コリでは異言のテーマが論じられた。
  - ③知識。御霊の賜物としての「神の真理」を理解する力である。
  - ④熱心。神に関連したことがらへの真実な熱心さである。

- ⑤愛。パウロが彼らから受けた愛である。
- (2) パウロは、このリストにもう1つの点を追加する。
  - ①この恵みのわざ。エルサレムの聖徒たちへの献金\*献金は、恵みのわざである。

結論: 異邦人からユダヤ人への献金

- 1. エルサレムの聖徒たちの貧困支援
- 2. 神学的必然性
  - (1) 感謝の行為としての献金
    - ①異邦人は、ユダヤ人を通して霊的な祝福を受けた。
    - ②それに対する応答として、物質的な祝福を分け与えるべきである。
    - ③この原則は、今も有効である。
  - (2) マケドニアとアカイアの諸教会の例
    - ①ロマ15:26~27

Rom 15:26 それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。

Rom 15:27 彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。

- 3. 異邦人信者とユダヤ人信者の一致と和解
  - (1) エルサレム会議(使15章)
    - ①異邦人は、ユダヤ人のようにならなくても、信仰によって救われるとされた。
    - ②異邦人信者とユダヤ人信者の間には、文化的・宗教的な隔たりがあった。
    - ③異邦人信者は、ユダヤ人信者に対して優越感を覚えるようになった。
  - (2) 異邦人への使徒であるパウロは、両者の一致を心から願った。
    - ①パウロ書簡には、異邦人信者とユダヤ人信者の葛藤を前提とした箇所がある。
      - \*ロマ9~11章
      - \* ## 2:11~14, 3:28
      - \*エペ2:11~22

# 4. 愛の実践

- (1) 信仰と奉仕の模範としての献金
  - ①神の恵みに対する応答
  - ②貧しい者への愛の実践
  - ③献金は、信仰表現の機会である。